

●できることなら明らかにしたい

名古屋における脱走兵援助活動

伊藤幹彦

ベ平連による脱走兵援助（ジャテック）活動については、多くの著書が出版されていますが、この名古屋における活動の記録については、今のところ稲垣喜代志さんも証言者になつていない。坂元良江・関谷滋編『となりて脱走兵のいた時代』（思想の科学社・一九九八）がある、だけです。この活動に関わつた人たちは、吉川勇一さんの言葉を借りれば、

ベ平連とは、警察の訊問に一言も口を割らず、身を挺して闘う平和の戦士団ではなく、普通の市民グループだった。自分たちの出来る範囲で、しかし、出来るだけの努力を自発的にやつていこうという人たちだった。

いちばん心をうたれるのは、いつ国外脱出ができるか、まつたく見通しのない状況下で増え続ける脱走兵を抱えてひたすら苦闘、苦悩する第二期メンバーの回想だ。

例えば堀田善衛夫妻、中野重治夫妻など多くの有名無名の人々の参加・協力が語られていて、あああの人か、この人もか、とその活動の裾野の広がりには驚く。（飛礫）より

そうはいっても、この脱走兵を匿う活動はしんどいことには違いなく、私は日頃の言を投げ捨て不様にもその活動から逃げ出してしまいました。しかし私の知る限り、その時の仲間には後ろ指を指すことなく、また関係者間の密告なく、当事者はその時もその後も、その活動を語ることなく、ましてや誇示すること寸分ありませんでした。

この書に実名で登場するのは、稲垣喜代志さんを初め小谷剛さんや鈴木鋼二さんなど数名に限られています。また、通称ジョーと呼んだ脱走兵を名古屋が匿つたのは、いつからいつまでだったのか、それさえも定かではありません。そして今少しづつ分かってきたことは、関わつた人の多くが私たちも承知している人であったということであり、何よりもびつくりしたのは、最近、「もくろの会」に参加してくれたHさんも実際に匿つた当事者の一人であったということでした。こうしたことに関する、吉川勇一さんの証言。

活動に関わつた一人である私でも、まつたく知らなかったことが実に多くあつた。秘密を要する活動の関係上、縦の系列の連絡網があるだけで、余計なことは一切言わないように聞かぬようにしてきたからで、この活動の期間中、全国的レベルではもちろん一都市の中でも関係者が集まつて討論したり経験を共有し合うような会合などは一度も開かれていなかったからだ。ようやく事実（それもまだ一部というべなのだが）が明らかになつた今、それをどう評価し位置づけるかなどは、まだ今後の課題なのである。

このジャテックの責任者は栗原幸夫（文学評論家）、高橋武智（当時・立教大学教員）の両氏であり、高橋宅は銃刀法違反というあらぬ容疑で家宅搜索を受けました。このとき『赤旗』は、「ベ平連は反共暴力集団」との論文を掲載するという時代状況でした。

あれから三十余年、記録として残せるものは残したいと思うのですが、どうでしょう。稲垣さんとHさんが仲間として「もくろの会」で何とかならないものかと……。

●岡田孝一「ベトナム反戦と文学者」

『中部の戦後文学点描』（中日新聞社刊）より
へ平連に末端のところで参加していた私なども、実際に受け入れを依頼される事態となれば、方針に反対だからといって目をつむり、手をこまねいていることはできなかった。（略）
相談する人も限られてくるが、文学関係者では亀山巖が親身になって、小谷剛には強引に頼みこんだ。

MPや警察の捜査も厳しいので、だいたい一週間を限度として次の場所へ移動する。私はライトバンを運転してこれにあたったが、ハンドルを握る私の手は緊張で固くなった。

●渡久地政司「岡田孝一追悼」

（渡久地政司HP）より

脱走したアメリカ兵を匿ってくれる人を捜して東奔西走していた私は、岡田さんの車で小谷病院に出掛けた。

匿う必要性とリスクなどを私が説明し、小谷先生は即答はされたが結果はOKだった。

小谷先生は初対面の私を信用してOKを出したのではない。岡田孝一という人物を信用したのだ。小谷さんはよく引き受けてくださったと改めて感謝したい。

そしてその手助けをしてくださり、その秘密を守り通してくださった岡田さんに二重丸の感謝を申し上げたい。

●鶴見俊輔「中心で担ったのは女性だった」

この運動はそれまでの運動とどういう風に違っていたか。それは女性が運動を担ったということです。

というのは、脱走兵を匿う家の中で、一人対一人で対するのは、その家の主婦だった。また脱走兵の脱出の現場の指揮をとったのも、しばしば重大な局面では女性でした。

イントピレットの四人のうちの二人は深作光貞邸、あとの二人は東京の私のおやじの家に移しました。親父は寝たきりでしたが頭はしっかりしていて脱走兵と知って喜んで握手していました。

長く置いてはおけないというので京都の家に連れてきたのですが、三度の飯を食わせたのは、細君でした。京都について言えば、五つほどの宿屋が協力してくれましたが、北海道ルートが駄目になってからの辛い時期を支えたのは女性の力でした。

急遽、明日の場所を探さねばならなくなった時、歴史家の北山茂夫に電話を入れますと「細君と相談して」とのこと、私はもうだめだと思いましたが、しかし直ぐに架かってきた電話は「細君はい」と言っているから引き受けるよ」というものでした。

●坂元良江「家庭の中に脱走兵を」

当時私たちは共働き夫婦で一歳の息子がいました。いつまでもとうわげにいかず、団地の中の友人とか職場の友だちの家にお願いしました。ですからしょっちゅう、また預かってくれる家を探さねばなりません。次から次と出てくる脱走兵にいつも不安な日々でしたが、本当にいろんな人たちに支えられて……。ごめんなさい。この話をしたら声が詰まってしまいました。

苦しい苦しい道のりがあつて、それはいつ終わったのか全然わかりませんが、全貌を知っている人は誰もいませんが、しかしいろんな処でいろんな人たちに支えられた運動だったということだけは言えます。

●藤枝滯子「受け入れ窓口の辛さ」

脱出ルートがつぶされたのは、送り込まれてきたスパイによるものでしたから、脱走したいと言っている相手がスパイでないかどうか、ほとんど直感で判断しなければならず、そのことの責任の重さ、ある意味での道徳的なしんどさという葛藤は、おおげさで気恥ずかしいのですが、ほんとうに真剣勝負の日々でした。

◆以上のうち、鶴見・坂元・藤枝談話は、

鶴見俊輔・吉岡忍・吉川勇一著『帰って

きた脱走兵』（第三書館・一九九四・

千五百円）による。

名古屋におけるジャテック活動を「できることなら明らかにしたい」との思いを述べましたが、本号でも記しましたように「そつとしておいてほしい」という声があることを知り、あちこちに問い合わせることは控えました。代わりに、いちばん初めに名古屋グループが引き受け、その期間も最も長かったアルバート・ブラウンに触れている「脱走兵が隣にいた時代」（以下『時代』という）を稲垣証言によって補足訂正しながら、その概略をまとめてみました。以下敬称略

名古屋に受け入れ方を打診してきたのは、ジャテック二代目の責任者・高橋武智だった。

〔余話一〕故北沢恒彦は、『家の別れ』（思想の科学社・78年）で、高橋を次のように活写している。

「この時ジャテックは、どうも二セの脱走兵を差し向けられているらしいという厄介な問題を抱えていた。小田実などは、ええやんけ、スバイだろうとなかろうと全部受け入れてしまえ、などと無茶苦茶な論法でその場の士気を喚起しようと務めていたが、いかんせん、実務の中心にいる男が疲れ切っていた。彼を別の誰かと交代させることが先決だった。そうはいっても、これはタイヘンな仕事。ここで手間どれば、この運動はボシヤったかもしれない。結果としてボシヤらなかつたのは、小田が例の無造作な仕事で『君どうや、やってくれんか』と指さした男が『ええ、いいですよ』とあっさり引き受けたからだ。その男は静かな口調で『私の大学の方の仕事の整理もあるので、一週間ほどの猶予がほしいんですが』といった。危機は三十秒で乗り越えられた」。

高橋は名古屋地方における援助協力を、フランス留学時代の知人で当時愛大教員であった佐々木康之（立命館大教授）に打診。

いわゆる活動家ではない佐々木は、共通の知人を持つていた豊田の鈴木鋼二（産婦人科医）と、院生の県学連副委員長であった村山高康（桃山学院大学教授）に相談。二人は早速に稲垣喜代志（風媒社社主）に連絡をとり、受け入れを受諾した。

豊田には当時、全国に名を馳せた「豊田市政研」というグループがあったが、このグループは単に豊田のみならず、前記の人や名古屋の各種グループ、杉浦明平の渥美グループとも連携していた。

〔余話二〕「豊田市政研」には、中小企業の経営に当たっていたので表面にできることは少なかつたが、まとめ役としては神谷長がいた。が惜しくも故人となつた。いま一人表に出ない人物に、当時学生だった室田（仮名）がいた。ジャテックの現場にいちばん関わつたのは彼だった。

表の一人には、最近の『朝日新聞』（〇六年三月九日号）の「市民と非戦④」にも登場の丸山真門下でもあつた鈴木鋼二がいた。

表のいま一人は渡久地政司。一九六三年の二十六歳の時、豊田市会議員選挙に立候補し、トヨタ資本と労組からは「アカ」と言われ、その『赤旗』からは「共産党候補を落とすためにトヨタ労使が資金を出して立候補させたトロッキスト」と書かれ、そのトロッキストからは「スターリン主義者」と揶揄されたが、どうしたことか三十名中十二位で当選。

『世界』や『朝日ジャーナル』はこの「豊田市政研」を、市民派登場として取り上げ、一躍脚光を浴びた。渡久地はその後も再選されたので、このジャテック活動中は制約を受ける市議という身分であつた。

このように、佐々木・村山、鈴木、稲垣によって形作られた名古屋グループは、以降一年間に亘るこの地方の活動を請け負うことになる。

稲垣喜代志は、心通じるとあれば誰彼となく協力を依頼し、それにまず岡田孝一が動いた。

岡田は中野重治を師とすることで著名だったが、朝日新聞をページされて印刷業を開業し、仕事上の小型車を持つていた。当時、車の免許を持つていたのはこの岡田と稲垣、そして鈴木のほか何人もいなかったのではないか。

ではアルバートブラウンは、いつ名古屋に来たのか。

『時代』には、「遅くとも一九六九年の一月初めの可能性が強い」とある。

故岡田孝一のお連れ合いの藤森節子さんの教示による岡田日記には、六十八年十一月二十九日「渡久地くん、脱走兵のことで来る」とあり、六九年三月十日「小谷剛氏にハワードくんの礼の電話をする」とあるという。

小谷剛は戦後第一回の芥川賞受賞者。同人誌『作家』の主筆者であり産婦人科医。「あちらから来た人」という小説（『作家』一九七二年十月号）でブラウンを引き受けたいきさつについて記しているが、月日などは記されていない。しかし岡田メモによつて、ブラウンが小谷産婦人科病院に匿われたのは三月初めということは確かとなった。

しかし『時代』の室田証言によると、「ブラウンと最初に行ったのは長野の白馬という記憶」がありスキーをしたという。とすると、名古屋グループが実際に引き受けたのは十二月か一月という可能性が強いが、三月上旬かもしれない。

では名古屋グループが、このブラウンの面倒をみたのはどれほどの期間か。

東京のメンバーの手帖に「六九・八・三、名古屋へ。八・五鶴田帰京」とあるのを受けて「そう言えば、確か女性が一人来て、僕も一緒に新横浜まで送って行った」という村山証言がある。

とすると、約七ヶ月間ということになる。この間、一体どれほどの人がこの活動に関わり、どんな思いをしたか。

「もくの会通信」を見た元県評事務局長の岩瀬さんから「ジャテックに関しては私も聊か活動したことを想いだしました」というハガキを受け、『時代』にあった「国労の施設に泊めてもらったことがある」という一行を思い出した。

一九六九年五月当時、スウェーデンには三百五十人以上の脱走兵が滞在していたといわれる。

そしてその多くは、反戦よりも厭戦から離脱した者といわれ、関わった人にとつては、まさにタイヘンそのものだったことは想像に難くない。

「アメリカ民主主義からも遠い、庶民。田舎のいちゃん。彼、街に出たことないよ。可哀相に、ほとんど」（室田）

「彼もこちらに付き合うのに苦勞したんじゃないかな。女の子でもいてくれたらいいのになあ、なんて話が出て、それはちよつとなんて言ったりして、ナーバスにはなっていた」（松本）

「先の見通しがなく抱えていたというのが、心理的にいちばんこたえたね。なぐさめようもないからね」（鈴木）

また『時代』には、一度だけ脱走兵と判つて警察の介入を受けたことが出てくるが、訂正を含めて改めて聞いた稲垣証言は次の通り。

ブラウンが、詩人〇〇さんの処にいた時のこと。〇〇さんが開いていた英語塾で高校入試の合格祝いが開かれ、その席にいたブラウンは、中学生たちに平和の尊さを説き、「私は脱走兵だ」と喋つてしまった。〇〇さんは、つい感激してそのまま通訳してしまった。が、その中に父親が保守系の市会議員である子供がいて家に帰つて報告したからたまらない。翌日「外人がいるらしいが誰や」と警察官がやつてきた。ブラウンは偶々そのとき家には居らずセーフ。

連絡を受けた稲垣と村山は夜中に車を走らせ、むずかるブラウンを慌てて連れ出して、間一髪免れたことがあつたという。

名古屋グループが関わつた脱走兵については、他にもロバート・J・フォリスという脱走兵のことが、『ベ平連と脱走米兵』（阿奈井文彦著・文春新書）にあり次のような微笑ましい記述もある。

「フォリスを東京から送り届ける名古屋駅のホームでは、互いにアサヒグラフを手にする打ち合わせになっていたが、近づいてきた男の手にあるのは毎日グラフ。彼は、アサヒグラフはうりきれたもんですから、と苦笑した」。

最後に、次の言を。

「あの頃は、道が半歩違っていたら人生がすっかり違っていた時代です」。

今、自分が平穩に暮らしているが故に、ジョーが元脱走兵であるために辛い思いをしてこなかったらどうかとか、幸せに暮らしているのらどうかとか、とても気懸かりです」（室田）

(その三) 補足

これまで追ってきたアルバート・ブラウンは、故岡田メモには、ジョン・ハワードと
呼ばれる二十一歳の通信兵とありました。しかしメモの日付から推察するに、全くの別
人とは思われず、そのメモの日付を追って判ったことは次のようなことでした。

●ブラウンを「名古屋グループ」が
受けたのは。

それは十二月か一月、ひよつとすると小谷医院
が受けた三月上旬かもしれないと、前頁で記しま
したが、岡田メモの**六九年一月**には、

「〇〇にアメリカ兵のことで電話する」
「〇〇からカンパを受ける」

といった文言が頻繁に登場します、

★推察するに、このとき岡田さんが集中していた
のは、宿舍の提供とカンパの要請だったと思わ
れます。

そして二十四日のメモは

「アメリカ兵の宿については、一ヶ月は確保
できたという連絡あり」

★ほつとする雰囲気は窺われますが、推察するに
その宿は、故森下圭司（医師）さん提供の白馬
の民宿ではなかったかと思われます。

森下さんは戦前からの活動家で、当時は県社
会党の顧問的位置にあつた覚えです。

二月になるとジャテックに関するメモは、

十六日「ピストル不法所持の名目で、ジャテッ
ク関係の予備校生逮捕と三ヶ所の家の家
宅捜査とのニュース」の一行のみ。

三月になると、にわか慌ただしくなります。

四日「渡久地くんと水谷勇夫（画家）、Hくん、
小谷剛氏のところをまわる」

六日「稲垣喜代志氏より電話」

九日「夜、小谷宅からH宅に移動する。ジョン
・ハワード君、二一歳」

十一日「Hくんより、ハワードくんのごことで連
絡あり」

★稲垣さんからの電話は、小谷医院の件について
の礼と、その後はどうするかといった内容では
なかったかと推察されますが、そうすると、小
谷医院での滞在期間は三日か四日ではなかった
かと思われます。

●Hくんと私のこと。

☆ 六六年の十一月、二階建ての市営住宅に住
んでいた私の自宅を一人の学生が訪ねてきまし
た。何故か、彼の姿を見て未だ幼児だった長男
は泣きやまず、隣の家の犬も吠え続け、私は玄
関口で恥ずかしいほどのカンパを渡して早々に
帰ってもらいましたが、翌々日の新聞には、「過
激派、豊和工業を襲撃」という大見出し。

※私と同様の訪問を受けた渡久地Hで最近知っ
たのは、彼は単に構内でビラを撒いただけ。

☆ しかしその後、父親の友人だった市の東京
事務所長のYさんから「最近何かコウアンに関
係したんではないの？」という電話を受け、小
心者故の大言壮語以外にその覚えなし、と答え
ましたが、家の回りに不穏な気配があると家族
が言うのを聞くにつけ、内心穏やかならざるも
のを感じてきた中でのジャテックの協力要請。
即座に「私は公務員」とだらしなく呟きました。

★Hくんが匿うことを引き受けたのは、私がにべ
なく断った後だったということを、私は最近ま
で知りませんでした。

Hくんも、私と同じ職場の公務員。

しかも彼の住まいは、中層の公団住宅で二階
があるわけでなく、そのうえ連れ合いは身重の
状態という、そんな中での引き受けということ
を私は全く知りませんでした。